

小学校国語科における「ことわざ」の理解と使用 ―表現と意味の関係を中心に―

Understanding and the using proverbs in the elementary school Japanese language course
—focusing on the relationship between expressions and meanings—

馬場 治 (人間科学部こども学科教授)

Hajimu BABA (Faculty of Human Sciences Department of Child Study Professor)

〈要旨〉

諺とは、昔から言い伝えられた風刺、教訓などを含んだ短句である。その種類や目的とするところは多様であるが、概して比喩をもって人を戒めたものが多い。学校教育における「ことわざ」の学習指導については、小学校学習指導要領(平成29年告示)国語編第3章各学年の内容第2節第3学年及び第4学年の内容1「知識及び技能」(3)我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導するに、「イ長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。」と記載されており、その解説には、「ことわざは、生活経験などにおいてありがちなことを述べたり、教訓を述べたりするものである。例えば、『塵も積もれば山となる』、『善は急げ』、『石橋をたたいて渡る』などがある。」と記述されている。小稿では、日本語における定型表現の観点から、児童の実生活における「生きる力」となる諺について、学習と指導の在り方の一端を考察する。

〈キーワード〉

小学校国語科 学習指導要領解説 伝統的な言語文化 ことわざ 学習指導事例

はじめに

先人達は、人生をより良く生きるための教訓や知恵を「諺」という表現に凝縮し、様々な場面に即して活用できるよう残してくれた。その「諺」は、たとえば時代は違っても普遍的な説得力をもち、現代社会や日常生活でも十分に通用するものが多い。いま最新版の国語辞典で「ことわざ【諺】」の意味を確認すれば、「昔から言い伝えてきた、訓戒・風刺などを内容とする短い句。」(岩波第八版)、「【語ト事ザワの意】その国の民衆の生活から生まれた、教訓的な言葉。〔短くて、口調ヨクウチのいいものが多い〕」(新明解第八版)と記述されている。また漢和辞典の【語義】には、「民間に言

い伝えられ一定の真理を反映したことは。ことわざ。」(全訳漢辞海第四版)とある。日本ことわざ文化学会会長の時田昌瑞は、ことわざの定義について、仮説的なレベルにとどまると断った上で、「絶妙な譬えを有する短くて耳響きよく、人々に言い習わされた多様で豊かな内容と気のきいた表現の言語芸術」と規定している⁽¹⁾。

確かに、聖人や偉人が残した厳めしい格言と比べ、庶民や世間から生まれた諺の方が親しみ易く、実生活において役立つ。それは、時田が説く如く、日々の営みの積み重ねから得た経験知を凝縮し、口誦のリズムがよく、記憶し易い字数(音節数)の少ない短句かつ複数の語が結合し慣習的にひとつのまとまった句を成す定型表現で、誰にでも共感と納得がゆくからであろう。辞典や教科書に選ばれ収録された諺

は、学校文化において正当化され、社会の常識的な価値観として普及している。しかし、語彙量や経験知が少ない児童だと、表現は丸暗記しているが、意味をきちんと理解せずに使用してしまう場合も多い。それは、巧みな修辭や比喩によって詳しい意味を知らずとも何となく言いたいことが分かり伝わる表現だからである。

そこで、小稿では具体的な「ことわざ」に即して、表現と意味の関係から、読書量が減り語彙量が乏しくなったとの見方もある今日の児童の、日常的な言語生活における理解と使用の実態を把握し、学習と指導の在り方の一端を考察してみたい。

『小学校学習指導要領解説 国語編』における「ことわざ」の記述

まず、学習指導の規範となる前回と今回の『小学校学習指導要領解説 国語編』(著作：文部科学省(発行：東洋館出版社))における「ことわざ」関連の記述がある箇所を引用して比較対照する(原文は横書き、傍線と波線は私による)。

平成20年8月

第2章 国語科の目標及び内容 第2節 国語科の内容

(4) 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

ア 伝統的な言語文化に関する事項

低学年では、昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること、中学年では、易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすることや、長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと、高学年では、親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読することや、古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること示している。

第3章 各学年の目標と内容 第2節 第3学年及び第4学年

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

(1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、

次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項

(イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

(イ)は、長く使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、日常生活でも使うようにすることにに関する事項である。

「ことわざ」は、生活経験などにおいてありがちなことを述べたり、教訓を述べたりするものである。例えば、「住めば都」、「犬も歩けば棒に当たる」、「急がば回れ」、「石の上にも三年」などがある。「慣用句」は、「道草を食う」、「油を売る」などのように、二つ以上の語が結び付いて元の意味とは違った特定の意味を表すものである。故事成語は、「推敲」、「矛盾」、「五十歩百歩」などのように中国の故事に由来する熟語である。これらによつては、先人の知恵や教訓、機知に触れることができる。言語生活を豊かにするために、これらの言葉の意味を知り、実際の言語生活で用いるようにさせることが大切である。

平成29年7月

第2章 国語科の目標及び内容 第2節 国語科の内容

(3) 我が国の言語文化に関する事項

○ 伝統的な言語文化

伝統的な言語文化に親しむことに関する事項である。

我が国の言語文化に触れ、親しんだり、楽しんだりするとともに、その豊かさに気づき、理解を深めることに重点を置いて内容を構成している。

各学年の「ア」は、音読するなどして言葉の響きやリズムに親しむことを系統的に示している。「イ」は、第1学年及び第2学年では言葉の豊かさに気付くことを、第3学年及び第4学年ではことわざや慣用句、故事成語などの長い間使われてきた言葉を知り、使うことを、第5学年及び第6学年では作品に表れている昔の人のものの見方や感じ方を知ること示している。

第3章 各学年の内容 第2節 第3学年及び第4学年の内容

(3) 我が国の言語文化に関する事項

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

イ 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

○伝統的な言語文化

長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、日常生活でも使うようにすることに関する内容を示している。

ことわざは、生活経験などにおいてありがちなことを述べたり、教訓を述べたりするものである。例えば、「塵も積もれば山となる」、「善は急げ」、「石橋をたたいて渡る」などがある。慣用句は、「水に流す」、「羽を伸ばす」などのように、二つ以上の語が結び付いて元の意味とは違った特定の意味を表すものである。故事成語は、「矛盾」、「推敲」、「五十歩百歩」などのように中国の故事に由来する熟語である。これらによって、先人の知恵や教訓、機知に触れることができる。これらの言葉の意味を知り、日常生活で用いるようにすることが大切である。

前回の「伝統的な言語文化に関する事項」は今回、「我が国の言語文化に関する事項」に変更された。「ことわざ」は、その最初の事項「伝統的な言語文化」の第3学年及び第4学年に位置づけられている。前回も中学年だったので、適切な学習年齢は同じである。発達段階としては、社会性を十分身に付けることができぬまま小学校に入学することにより、精神的にも不安定で、周りの児童との人間関係をうまく構築できず集団生活に馴染めない所謂「小1プロブレム」が過ぎ、小学校での集団生活によりやく慣れてきて友達との輪も広がり所謂「9歳の壁」を迎える時期である。文部科学省^{初等中等教育局児童生徒課}は、「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」において、小学校高学年の時期における子どもの発達において重視すべき課題として、「●抽象的な思考への適応や他者の視点に対する理解 ●自己肯定感の育成 ●自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養 ●集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成 ●体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくり」の五つを挙げているが、身の回りの具体的な事物を比喩的に用い言語化された「ことわざ」は、日常生活や他者との関係性における具体的な体験場面を目に見えない抽象的な思考によって普遍化し自他を利する汎用性が期待される。学童期の中学年は、生活面でも学習面でも高学年へのステップの分岐点に当たり、様々な壁にぶつかった児童にとって「ことわざ」は、現場における自己の行動や思考そのものを認知や省察の対象とするメタ認知能力を高め、生き方の羅針盤になると考える。

児童個人の語彙量は普通、理解語彙が使用語彙に勝るが、「ことわざ」に限ってはイメージが先行し、現場のコミュニケーション状況から「こんな意味だろう」と類推して口頭で使用する場合が多い。文章を書き記す場合に、心内辞書に備わった理解語彙から文脈に適したものを選んで使用語彙として使う方向性とは真逆である。

このように、現場での表現が意味の理解に勝る「ことわざ」だからこそ、何度か同じ状況に遭遇するうちにその意味に確信が持てたら自分でも使ってみるといった経験に依存するだけでなく、規範的な辞典で意味や用例の記述を確認して、各自の言語生活において適切に使用できるようになる学習指導を行う必要があると考える。

二 国語教科書の単元教材における「ことわざ」の記述と学習指導事例

平成23年度版教科書「小学校国語四下はばたき」(光村図書) 92頁では、単元名「ことわざブック」を作ろう／児童の活動目標「調べて、まとめて、読み合おう」／学習上のポイント「ことわざを調べて、その意味を知りましょう。ことわざや故事成語を集めて、本を作りましょう。書く」で、具体例として「犬も歩けばぼうに当たる」、「わかいときの苦労は買ってもせよ」「頭かくしてしりかくさず」「さるも木から落ちる」「急がば回れ」「所変われば品変わる」「帯に短したすきに長し」「ねこの手も借りたい」「わが身をつねって人の痛さを知れ」「かわいい子には旅」「やなぎの下にいつもどじょうはいない」を挿絵と対照させて挙げ、「▼ことわざには、同じようなとくちょうをもつものがあります。ここにあることわざを、次のとくちょうごとに、分けてみましょう。●動物が出てくる。●にた言い回しがくり返されている。●こうしたほうがいいという「教訓」が表されている。意味が分からないことわざは、国語辞典や、ことわざの本などで調べてみましょう。」と学習指導に必要な説明を加えている。更に93頁欄外には導入時に必要な定義の確認として「ことわざ 生きていくうえでのかえや教えを、短い言葉や言い回しで表したものの。」「故事成語 ことわざに似た短い言葉。中国に伝わる古い出来事や物語がもとになっている。」と両者の相違を注記している。94頁には「ことわざブック」作成に必要な視点として「1 同じとくちょうをもつことわざを集めて、意味を調べよう。」を掲げ、その内訳を「意味に着目する●教訓●反対の意味」「出てくるものに着目する●動物●数字●食べ物●虫」「表現のとくちょうに着目する●

たとえば●くり返し●組み合わせ」としている。これは、「ことわざ」を分類し、範疇化・系統化する語彙学習に通じる。次に「2」本の中身を作ろう。集めたことわざを使って、自分なりのアイデアで本の中身を作りましょう。」の具体例として記録カードに「表」おひな様よりひなあられ「花よりだんご」のまね（意味）ひな祭りでは、ひな人形をかざって楽しむけれど、人形よりも、ひなあられのほうがおいしくて好きなこと。目で楽しむよりも、食べて楽しむほうがいいということに使う。「うら」花よりだんご（意味）ただ見た目がいいものよりも、じっさいに役に立つもののほうがいいということ。え。（小学国語辞典）ひかり社」を挙げている。この手法は、ことわざをもじって、おもしろ可笑しくする「ことわざパロディ」である。比較構文の定型表現「名詞A〔外観〕より名詞B〔実質〕（の方がよい。の方を尊ぶ。）」に、季節の行事に定番の品目を入れることによって違う品目でも組み合わせ次第で同じ働きや趣などになる「取り合わせの妙」を味わうことができる。児童はクイズ感覚で楽しむこともできよう。これは、文部科学省（教育課程部会教育課程企画特別部会）「小学校段階におけるプログラミング教育の在り方について（議論の取りまとめ）」（平成28年6月）が「自分が意図する一連の活動を実現するために、どのような動きの組合せが必要であり、一つ一つの動きに対応した記号を、どのように組み合わせたらいいのか、記号の組合せをどのように改善していけば、より意図した活動に近づくのか、といったことを論理的に考えていく力」と定義した「プログラミング的思考」における物事の類似性や関係性を見出す「一般化」にも通じ、類推能力を高める学習効果が期待される。但し、品目が具体的に実利主義的な解釈のみで、具体物の属性から物事の本質を修辭的に抽象化した教訓的な比喻表現ではない点を弁えておく必要がある。

令和2年度版教科書「小学校国語 三下 あおぞら」（光村図書）56頁では、単元名「つたわる言葉 ことわざ・故事成語」となり、冒頭でことわざを集めて作った「いろはがら」を写真入りで紹介している。その導入の後、四下のように具体例を挙げ、「▼次のことわざの意味を、国語辞典やことわざの本を使って調べましょう。ことわざの本で調べるときは、目次やさくいんを使いましょう。」との説明があり、ことわざの特徴ごとの分類より、調べ学習のコツの方を重視している。学習指導書別冊には「▽辞典や書籍などによって、同じものがことわざとして紹介されていたり、慣用句として紹介されていたりといった違いがあることがある。二つは厳密に分類

できない場合があることも伝え、混乱がないよう指導されたい。」と朱の注記がある。現に、日本国語教育学会編『国語教育辞典』（朝倉書店平成13年8月）は、「語彙・語句の指導」の見出し項目のうち「慣用句」の下位に「慣用句・故事成語・格言・ことわざ」の四つを分類している（72頁）。教科書は単元の最後に「書きましょう」の印付きで「ことわざ辞典を作ろう」の言語活動例が示されている。四年は個人的な取り組みだったが、三年は「グループで、自分たちのことわざ辞典を作ってみましょう。」に変わっている。学年が下がったことへの対応だろう。学習指導書の「伝える言葉」設定の趣旨には、「本系列では、長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知るとともに、その豊かさにつれ、理解を深めることをねらう。先人たちにより培われてきた言い回しを知り、実際の日常生活において使うことで、児童の言語生活を豊かにしたい。」、単元設定の趣旨には、「ことわざや故事成語を集めて辞典としてまとめる活動を通して、積極的に興味をもち、自らの生活の中で使える言葉として習得することを旨とする」とある。意味の理解と生活での使用を車の両輪として学習を進める指導事例として辞典やカルタは書く領域だが、前段階では読む領域における語彙の蓄積が肝心である。また、「ことわざ」は会話で使用される傾向が強いので、話す・聞く領域の事例も必要だろう。その一つに「ことわざストーリー」（ことわざを題材にした二人語り用ショートストーリー）を台本とする「二人語り発表会」（ストーリーテリングの一つ。二人の語り手が台本通りの文章に台詞を織り交ぜながら身振り手振りも付けてストーリーを語る）がある。フロアの児童は聞き手となり、語り手の合図に合わせて決められた台詞を言ったり、決められた動きをしたりする。リズムカルなストーリーはビジュアル化され、語り手と聞き手が一体化して物語の世界は深まり、楽しさも倍増するとの報告もある⁽²⁾。このような演劇的な疑似体験は経験知の不足を補い、「ことわざ」の知識を実際に活用するための有効な手段だと言えよう。

三 具体的な「ことわざ」に即した学習と指導の在り方

読む領域で「ことわざ」の意味を理解するために規範となるのは辞典の記述であるが、教員が学習指導する際には、児童向きと教員向きを併用する必要がある。なぜなら、語彙量や経験知が少ない児童では理解しやすいよう実際に使われる

場面に相応しい例文に振り仮名や挿絵が入った辞典が適当だが、語彙量や経験知の絶対量が担保されている教員は「ことわざ」の出典や用法の解説が詳しい辞典まで確認しておく方が、歴史的かつ社会的な背景から生まれた言葉として「ことわざ」を教えられ、「主体的・対話的で深い学び」を促すことができるかと考えるからである。いずれも辞典を引く際には、意味（（解釈次第で意味が）変わる場合あり）と例文（（場面を反映した挿絵入りの場合あり））の確認だけでなく語彙を増やすため芋蔓式に類義語と対義語も探す習慣を付ける指導をするといえよう（「意味は拡張して派生する多義性をもつ点について、身体部位の一つである「口」が」「口が違わずに話す能力が優れている」等になると例示すれば、効果的だと思われる」）。

いま試みに、数多の「ことわざ」の中から認知度と汎用性が最も高い「石の上にも三年」「石橋をたたいて渡る」「犬も歩けば棒に当たる」の三例を各々、学習や生活の指針となる三つの価値観の代表として配当し、指導の在り方を模索してみたい。児童向き辞典は次の[甲]から、教員向き辞典は次の[乙]からの引用である。

[甲] 川嶋優編『例解小学ことわざ辞典』（三省堂平成21年12月）

[乙] 北村孝一監修『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』（小学館平成24年2月）

A 努力と忍耐の代表「石の上にも三年」（述部動詞を省略した体言止め表現）

[甲] 意味 冷たい石の上にも三年座り続けていれば、石も温まってくるということ。で、がまん強く努力を続けられ、必ずうまくいくようになるという教え。例 石の上にも三年、やっとレギュラーの座をつかんだ。

[乙] *俳諧・毛吹草（1638）二「いしのうへにも三年あればあたま」*浮世草子・西鶴織留（1694）「商人^{あき}、職人によらず、住みなれたる所を替かゆる事なかれ。石^{いし}の上にも三年と俗言^ごに伝へし」*諺苑（1797）「石の上にも三年 堪しのぶべきの喩なり」*猿飛佐助（1948）〈織田作之助〉水遁巻「石川や浜の真砂の数あれど、石の上にも三年の伊賀で覚えし忍術を、いざ鎌倉のその時に」補説 石は冷たいもので、すわってから長時間が過ぎればようやく温まってくるというのが原義だが、近年は、すわるのはつらい石であっても、長くがまんしていれば慣れるという解釈をする人も少なくない。なお、「三」は象徴的な数で、少ないものにも多いものにも使われるが、区切りとして意識されることが多い。この「三年」も厳密なものではなく、新しい環境や仕事に慣れ、ゆとりの出てくる時期として用いられている。

B 成功と失敗の代表「石橋をたたいて渡る」（移動動詞「渡る」を用いた表現）

[甲] 意味 石でできたがんじょうな橋を、安全を確かめながら渡るとい意味で、用心に用心を重ねて行うことのたとえ。例 石橋をたたいて渡るような社長だから、会社が大きな損害を被る心配はない。参考 用心し過ぎる人に対して、皮肉って使う場合もある。類 念には念を入れる。浅い川も深く渡れ。対 危ない橋を渡る。

[乙] *譬喩尽（1786）「石橋^{いしきょう}を叩^{たた}いて涉^わつたるより丈夫さうな事ぢや」*国民の品位（1878～91）「石橋をたたいて渡る」*社会百面相（1906）〈内田魯庵〉投機・七「お父さんは極く堅いのがお好きで石橋を叩いて渡る方だから」*一商人として（1938）〈相馬愛蔵〉序言「もし中村屋の商売の仕方に何かことなつたものがあるとすれば、それは皆素人としての自分の創意で、何処までも石橋を叩いて渡る流儀であり」*二流の人（1947）〈坂口安吾〉「しくじる時はどう石橋を叩いてみてもしくじるものでござらうて」

C 幸運と不運の代表「犬も歩けば棒に当たる」（観察的事象に基づく条件表現）

[甲] 意味 ①でしゃばると、思わぬ災難に遭うから、じっとしていたほうがよいといういましめ。例 君は何にでも首を突っ込んで言いたいことを言うから、人にうらまれるのだよ。犬も歩けば棒に当たるだ。少しは静かにおとなしくしていなよ。②動き回っていると、意外な幸運に出会うこともあるというたとえ。例 自分の部屋に閉じこもっていないで、たまには外出してごらん。犬も歩けば棒に当たるで、きつといいことに巡り合えるよ。参考 犬がふらふら出歩くと棒で打たれるということから。もとは①の意味だったが、現在では、①②の両方の意味で使われている。「いろはガルト」にある。

[乙] *浄瑠璃・賀古教信七墓廻（1714頃）三「犬もあるけば防風の刺身のけんによもない仕合せ」*浄瑠璃・鐘の権三重帷子（1717）上「わしは戌で長六十。うろたへあるいて、棒にあはぬさきに、ながばへせずとるにましよと」*浄瑠璃・蛭小島武勇問答（1758）三「じたい名が氣にいらぬ、犬様の、イヤ犬房様のと、犬も歩けば棒にあふ」*諺苑（1797）「狗もあるけば棒にあたる かせいて事をする者は禍に遭ことありとの喩なり 犬のあるけば棒にあふと云ふ 一説には存じよらずよいめに逢たることにも用ることわざなり」*いろは短歌お伽話（1900）〈福田琴月〉

一「犬もあるけば棒にあたる つまらない身分でも、正直に働きさへすれば、いつしか思はぬ、好い運が授かります」*東西伊呂波短歌評釈(1900)〈幸田露伴〉「犬イヌも歩アルけば棒ぼうにあたる(略)事を為すものは思はぬ災を受けることありといふ意、又は其の反対に、才無き者も能く勤むれば、幸を得ること有りといふの意」

補説 幸運説と不運説の相反する二つの解釈があるが、用例は圧倒的に前者が多い。通常の語法では後者の解釈になるが、文全体を逆接としてとらえると、前者の解釈が可能となる。比喩として「犬」は身分の低い者をさすから、自らこの表現を肯定的に使う場合は、深層でかなり屈折した心理が働くことになる。斜にかまへ、ひねりを利かせた表現といつてよい。こうした言語感覚は江戸っ子の粋に通じるもので、しかも、現実の場面で自己に不利になったときには、「鍵の権三重帷子」のように不運説の字義どおりの表層的な解釈に逃げ込み、自己防衛をはかることもできるものであった。

AとBは、「冷たい」「硬い」といった「石」の属性を利用した比喩である。Aは、江戸初期の「いしのうへにも三年あればあたたまる」の例文からは「冷たい」の属性が原義だと理解できるが、「石の上にも三年」の体言止め表現からは、「硬さに慣れる」との解釈も可能である。教員ならば禅宗の開祖である達磨大師が石の上で座禅している逸話からその姿を想像して「努力・忍耐・我慢・辛抱」といった抽象概念を認識できるが、児童には難しいだろう。故に、児童が生活に関連した習い事やスポーツの技能を身に付ける等、現実的なシチュエーションにおける例文の方が親しみ易い。「継続」の概念も加えるなら、人為ではなく自然現象の類義表現として「雨垂れ石を穿つ」を紹介するのも効果的だろう。Bは、乙の例文から、多く経営や商売に関する場面で用いられている点に気づかせ、類義表現として「転ばぬ先の杖(を突く)」を紹介し、何事も用心深いのは結構だが、用心し過ぎて物事が捗らないタイプの児童には「案ずるより産むが易し」を紹介し、「悩むより思い切つてやってみると案外にうまくいくものだ」という経験知を教えるといいだろう。

Cは、野生の狼を起源とし旧石器時代以来、人間の生活に役立つ家畜からペットとなった「犬」の属性を利用した比喩である。身近な動物として家庭で飼う日常的に触れ合っている児童も多い。生物的に人間よりも嗅覚と聴覚が鋭く警戒心が強い犬だが視力は弱いので、敵意なく存在する棒だと偶然ぶつかる可能性はある。その

様子を観察した庶民の経験知から生まれた諺だろうが、社会的に士農工商の階級があった江戸時代には「身分の低い者」といった卑下する深層心理も働いただろう。三味線を伴奏とする語り物音楽の一種である浄瑠璃の典故から教師は歴史的背景を踏まえた指導をすれば、児童は「江戸時代の伝統芸能における諺」「文脈の解釈次第で真逆の意味となる場合がある」等に気づき言語感覚が磨かれ、「主体的・対話的で深い学び」を実現できると考える。幸福と不幸の具体例を考える発問も有効で、「餌が貰える」(愛護)や「棒で打たれる」(虐待)等の回答が出れば面白く、前掲「ことわざストーリー」に仕立てて場面を再現すれば「ことわざ」の実態に迫れる。語彙指導の改善・充実への発展学習としては、「禍福は糾える縄の如し」「人間万事塞翁が馬」等の両義性をもつ故事成語の紹介や、擬人的な動物を題材にした諺「借りてきた猫」「張り子の虎」「猿も木から落ちる」等を探す授業が有効だろう。例文出典の一つである江戸時代の国語辞書『諺苑』⁽³⁾についても触れれば、国語辞典編纂への興味も湧き、言葉を収集して分類する労力と工夫の一端を知れよう。

四 今後の課題と展望

甲にも収録されている「悪女の深情け」等は、ジェンダー(社会的・性的差)に関わるので、用例として取り扱う際には注意が必要である。また、グローバル化に伴い、国際社会で活躍できる人材を育成する目的で英語が小学校から必修化されたので、「The dog trots about finds a bone」(歩き回る犬は骨を見つける)等、類似の意味をもつ英語の表現も併せて学習指導をする必要がある。

注

- (1) 中島平三編『ことばのおもしろ事典』(朝倉書店 平成28年4月) I部 ことばを身近に感じる 第I章 日本のことわざの真髄は、いろはカルタ! 時田昌瑞執筆 3頁
- (2) 花田修一監修・編著『伝統的な言語文化の学習指導事例集2 ことわざ・故事成語・慣用句を中心とした学習指導事例集』(明治図書 平成23年11月) 第2章「伝統的な言語文化」の学習指導の実例 第1節「ことわざ」を中心とした学習指導1「石の上にも三年」など 加藤一樹執筆 44頁〜48頁。
- (3) 諺苑(古典覆刊第一) 太田全斎著 藤井乙男解説 富永牧太校訂 養徳社 昭和19年(デジタル化出版者 国立図書館 平成22年)、藤井乙男解説「諺苑から俚言集覽へ」を参照。